

# 源平最後の決戦の地 壇ノ浦へ

一一八五(文治元)年五月(旧暦三月)に源平最後の決戦「壇ノ浦の戦い」が行われて、今年でちょうど八百二十年。NHK大河ドラマ「義経」も放映され、その決戦の地となった下関市が注目を集めています。栄華を極めた平家の平安時代から、源氏の鎌倉時代へと時代を大きく動かした歴史舞台の地を訪ねました。

文 網野ゆかり

下関の「火の山展望台」から見下ろした関門海峡

平家が源平最後の決戦の地に、本州西端の関門海峡を選んだのは、そこで勝利することで瀬戸内海の制海権を保ち、九州で立ち直りを目指そうとしたためと推測されています。そもそも平家隆盛の源は日宋貿易にあり、その拠点となっていたのが博多港。博多港と京都を結ぶ瀬戸内海は平家にとって重要な動脈であり、東口の軍事の要が四国の北限に位置する屋島、西口の要が関門海峡の彦島。つまり平家軍は、屋島の戦い前から瀬戸内海を東西で固めて源氏を迎え撃つ作戦を立てていたのです。

しかし、文治元年(一一八五)二月十八日、平家軍は屋島の戦いで敗北。平家総帥の平宗盛は同年三月、下関彦島に陣を敷いた平知盛のもとまで落ち延び、一族の起死回生を賭けて、最後の決戦に臨むことになった。対する源義経の源氏軍は、屋島の戦い前から源氏を数カ月で五〇〇余隻の平家軍をしのぐ八四〇余隻(「吾妻鏡」による)の水軍の編成に成功し、関門海峡に浮かぶ二つの小島、満珠・干珠に軍を集結させます。

## 義経勝因の理由とは？

源氏の勝因のつは、潮の流れを義経がうまく利用したためという説が以前から唱えられてきました。関門海峡は潮が速く、潮の向きも日に四度変わる船の難所。当日午前中は潮流が西から東へ流れ、西から攻めた平家が優勢でしたが、午後には西流れに変わり、その流れに乗じた源氏が平家軍に勝利したのです。しかし近年の研究で、戦時の潮流は緩やかで、戦に影響はしても勝敗を左右するほどはなかったという説が主流になりつつあります。源氏の勝因の一つめは、平家の軍船を漕ぐ舵取・水手らに矢を放つ

船の自由を奪うという、義経の奇襲作戦にあつたといわれています。船を漕いでいたのは地元漁師たち。非戦闘員に矢を放つことは、当時の武士にとって考えられない旋破りの戦法でした。



義経・知盛像が設置された「みもすそ川公園」。この眼前の海で、壇ノ浦の戦いが繰り広げられた。

毎年5月3日に行われる「しもせき海峡まつり源平合戦」。地元の漁船が、平家の赤旗、源氏の白旗をなびかせて、壇ノ浦の戦いを再現する。

## イルカが予告した戦いの結末？

今壇ノ浦に建つ赤間神宮は、幼くして亡くなった安徳天皇の霊を鎮めるために建立された霊廟と「阿弥陀寺」という尼寺が前身で、その建立を願ったのは後白河法皇であると長年いわれてきました。

ところが、昭和五十一年、国の重要文化財指定の赤間神宮文書「阿弥陀寺絵図」を修復中、同寺は壇の浦の戦の二年後、源頼朝の願いで建てられたことを示す朱書きが見られました。後に弟の義経を討伐させる冷徹な面の印象が強い頼朝ですが、その発見は意外な一面を浮かび上がらせてくれます。

赤間神宮といえは、同神宮が所蔵



赤間神宮の現在の社殿は、二位尼の最期の言葉に因んで「竜宮城」をイメージして建てられたもの。境内には「安徳天皇阿弥陀寺御陵」、平家一門の墓「七盛塚」などがある。

## 安徳天皇は実は生き延びていた？

する、安徳天皇縁起絵巻」に興味深い絵が描かれています。それはイルカの群。平家物語には、戦の最中、沖からイルカの群が平家の船へ向かってきたため、平家は同乗させていた陰陽師に吉凶を占わせたという語が出てきます。その結果は、イルカの群れが源氏の船へ向かえば、平家の勝利。平家の船の下を通り抜ければ、負け戦になる。そして実際、イルカの群れは平家の船の下を通り抜け、上り通り、平家の負け戦になったのです。赤間神宮の宮司さんによれば、潮流が変わる際に、沖から魚の群れを追うてイルカが現れることは、実際にあるとのこと。そう聞いて海峡を眺めると、何百年も前の遠い戦が間近に迫ってくるような気がします。

母である二位尼とわが子である安徳天皇の後を追って、入水した建



礼門院は、源氏に助けられ、囚われの身となりました。安徳天皇の命は助けられず、関門海峡のすぐそば、海を見下ろす小高い丘に、赤間神宮境内の安徳天皇阿弥陀寺御陵に、その御霊は眠っています。

ところが、実は安徳天皇は難を逃れて生き延びられた。という伝承地が全国各地に残っているのを存じてしようか。しかも、明治時代に宮内庁から正式に指定された安徳天皇御陵(彦島)と、このものが、海峽を遠く離れた下関市豊田町・鳥取県八頭町・長崎県対馬市・熊本県宇土市・高知県越智町と謎めいた幼帝の「御陵」の数は5カ所を数えます。

さらに、「安徳天皇潜幸説」の伝承地を挙げれば、福岡県・徳島県・愛媛県・大分県・鹿児島県・大阪府・香取。平家の落人が隠れ住んだといわれる地は山深い地が多く、それだけに今どこも過疎化と高齢化の波が押し寄せています。何百年も秘かに語り継がれてきた伝承もゆかりの史跡も、これからどう受け継がれていくのか。そんな思いから今年、伝承地を冊にまとめた本、平家伝承地総覧が、全国平家会から発行されました。

源平の歴史が注目されている今、下関をはじめ全国各地に残る平家ゆかりの地を訪ねて、ロンをばせてみてはいかがでしょう。



関門海峡に浮かぶ二つの小島「満珠・干珠」。源義経はこの島付近に集結して戦に備えました。



赤間神宮にある「耳なし芳一」の芳一室。関門海峡の船着き場には昔、瀬侍ちの人を相手に、平家物語を弾き語る琵琶法師が数多くいたといわれ、「耳なし芳一」もその1人。



下関は、フグの水揚げ量日本一のまち。旬はもちろんだら、フグの本場ならではの天然トラフグの旬のポンノの炒める炒めを、ぜひ本場の地で堪能を!

毎年5月2・3・4日に行われる「しもせき海峡まつり源平合戦」。その最大の行事「上關道中」は、壇ノ浦の戦い後、生きながらえた平家の女官が女郎に身を落とすことから安徳天皇を慕い、その命日に威儀を正して御陵に詣でたことに始まるとい。

